
裂かれた札

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裂かれた札

【Nコード】

N9834E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

京から江戸に下ってきた仁八。見初めた女の子と共に京に帰ろうとするがそこで札をもらったが何とこれにより。古典を題材にしたお話です。

第一章

裂かれた札

江戸時代のはじめの頃のことだ。丁度將軍が三代の徳川家光になった頃だ。京の都から江戸に下ってきた仁八という優男がいた。

肌は白く目は切れ長で唇は小さく赤く至って優しい顔をしている。身体つきも細く一見すれば女にも見える。鬚がなければまことに女にも見える顔立ちである。

その彼が江戸に来てまず入ったのは蕎麦屋だった。腹が減ってそれを頼んだのだ。

「江戸は蕎麦屋が多いみたいだね」

屋台のその店に入って親父にそれを問う。

「ここに入るまでもう何軒も見ているよ」

「まあ最近多くなっていやすね」

屋台の親父も笑ってそれを認めてきた。

「確かに」

「しかしそれにしても」

「何でしょうか」

「いや、蕎麦はいいとしてね」

ここで話を変えた仁八であった。

「女の子も可愛いのが多いね」

「最近やつとですよ」

親父は蕎麦を出しながら仁八に答えた。

「この前まで町にいろっっていったら野郎ばかりで」

「そうだったのかい」

「いやいや、むさ苦しいの何のって」

これは本当のことだ。江戸は急激に拡大し人手をあちこちから集めた。その人手というのは人夫であり言うまでもなく男だ。それで江戸は男ばかり多かったのだ。

「最近になってやっとですねぇ。本当に」

「ふうん。そうだったのか」

「で、蕎麦ですけれど」

「あっ、うん」

親父に合わせて蕎麦を見る。見事なざるそばである。

「つゆを少しだけつけて噛まずに一気にやるんですよ」

「一気にかい」

「そう、飲み込む」

実際に蕎麦を操る動きを手で作りながら仁八に教える。

「飲み込むですよ。いいですね」

「わかったよ。それじゃあね」

「はい。じゃあそういう食べ方で」

「頂くよ」

箸を取って親父に言われるままの食べ方で蕎麦を食べた。それは京の蕎麦とは全く違い何処か不思議な感じがした。しかし美味しいことは確かであった。

その蕎麦の美味さを味わった後で町を歩いて用事を済ませた。その帰りにふと道の占い師に声をかけられたのだ。小さな机を出してその前に座っている行者の格好をした中年の男であった。京にもよくいるようなそんな占い師であった。

「待たれよ」

彼は仁八が自分の横を通ると彼に声をかけてきた。

「その御仁」

「それは私のことでしょうか」

「左様、御主だ」

行者は何か武士の様な物言いで彼に声をかけてきた。かなり大袈裟な調子である。

「その御主、話を聞くのだ」

「聞けと言われれば聞きますが何用で？」

「率直に言う」

行者はまた言葉を出してきた。有無を言わせぬ様子だ。

「御主、災いに遭うぞ」

「災いに？」

「御主の連れている者が化け物に殺される」

不意に訳のわからないことを言ってきた。少なくとも仁八にはそう思えるものだった。

「化け物に！？連れが！？」

「その通りだ。このままではな」

「それはまたおかしいことで。私は一人ですよ」
笑ってそれを否定した。

「それでどうして連れが殺されるなどと」

「わしには見えるのだ。これはまことだ」

しかし彼は言う。

「御主の連れがな。それでだ」

「それで？」

「金是要らん。これを持っていけ」

こう言って仁八に何かを出して来た。それは人型の白い小さな紙であった。腹のところは何やら黒い墨で書かれているがあまりにも独特な文字なので仁八には読めなかった。

「これをな。そうすれば難を逃れられる」

「左様ですか。お金は要らないと」

「こんなもの一枚どうということはない。それに」

「それに？」

「金を払えと言えば要らぬというであろう」

行者はそう読んでいたのだ。

「違うか？それは」

「いえ、その通りです」

彼自身それを認める。上方はそうしたところは江戸よりせちがら
いのである。

「それに関しては嘘は申しません」

「だからだ。そのまま持って行くのだ」

こう言って渡すのだった。

「よいな。これで助かる」

「助かりますか」

「安心せよ。それではな」

「はあ」

何が何なのかわからないままその人型の札を受け取った。そのうえでその日は宿に泊まり翌日京に帰ろうというところで一人の旅の女と道が同じになったのだった。

「今日にですか」

「はい、帰ります」

その女の名前をお淀という。背が高く眉がすらりとしており目元が実に涼しげだ。器量よしと言ってもいい。旅姿でありそれで京まで戻るといのである。何でも江戸にいる親戚の店に手伝いに出ておりそれが終わったというのだ。

第二章

「それではわしと同じではないか」

「あなた様とですか」

「実はわしもそうじゃ」

そうお淀に語るのだった。

「用事でこの江戸に出ていてな。それで戻られると」

「その通りだ。今からな」

「では道が同じですね」

「そうだな。しかし」

ここで彼は親切心を抱いたのだった。やましいところはなかった。

「女が一人というのは危なくはないか」

「それはまあ」

これを言われるとお淀も女だ。思い当たるところはあった。

「江戸までの道でも何かと怖そうな場所がありました」

「泰平になったがそれでも盗人の類はまだいるからな」

随分と減った。しかしそれでもいることはいるのだ。ましてや家光の時代はまだ泰平になって間もない。そうした物騒な事柄がまだ残っていたのだ。

「どうだろう。京までわしと一緒に帰ろうか」

「京までですか」

「御主も京であろう？」

このことを念押しする形で尋ねる。

「それならば。無理にとは言わぬが」

「そうですね。それでは」

お淀も仁八の言葉に頷く。これで決まりであった。こうして京までの道中二人で共に帰ることになった。仁八もお淀も互いに快く話を交えつつ朗らかに京にとのぼる。二人は話せば話す程仲がよくなり何時しか兄妹か夫婦の様になった。何かあれば飯を分け合い互い

に寄り添って道を進んだ。

その中で。ある日のことだった。もう宿に入る時間になったが残念なことにそこは道中であり宿場町は遠かった。そのうえもう完全に暗くなってしまっていた。

「さて、これは弱ったぞ」

仁八はすっかり暗くなってしまった辺りを見回して途方に暮れた声を出した。

「幾ら何でもこの辺りで休むわけにはいくまい」

「全くです。しかし」

お淀も辺りを見回す。しかし道中には人っこ一人いない。いるのは二人だけなので余計に心細かった。そこに烏の鳴き声が風に吹かれた草木の音がして寂寥をさらに増していた。

「このままでは」

「野犬でも出たらことだな」

仁八はそのことを心配した。このままでは自分とはまかくお淀が問題だ。そう思って心配したのだ。それで周囲を見回して言うのであった。

「とにかくせめて野犬や夜露をしのげる場所を見つけよう」

「そうですね。それでは」

「うん」

こうして二人は周囲を見回しつつ歩いていった。程なくして一つぼつんとある堂を見たのだった。

それを見てまずは仁八がお淀に声をかけた。

「あそこでどうだ」

「そうですね」

お淀は仁八のその言葉に頷いた。

「あの中でなら問題ないと思います」

「今宵はあの中で一晩だな」

「はい、それでは」

こうして二人はその堂の中に入ることにした。堂は外観はかなり

寂れていて今にも崩れ落ちそうだった。木がどれも半分腐ろうとしていた。階段に足をかけただけで崩れ落ちそうだ。二人はそれだけで何か不吉なものを感じた。しかしそれでも野犬や夜露を凌げるのなら。贅沢は言えないのだった。

「かなり酷く寂れているな」

「周りに村もないので誰も参らないのでしょうか」

「そうか」

「はい。ですから」

話しながら階段を登り終え堂の戸に手をかける。そのところもやはり腐りかけている。何とか開けるが。その中もやはり酷いものであちこちに蜘蛛の巣があるのが月明かりに見える。二人はそれを見て絶句した。

その中でお淀が。仁八に対して言うのだった。

「ここで宜しいですね」

「致し方ないだろう」

仁八は苦い顔になっていた。しかしそれでも言うのだった。

「犬に遭うよりましだ」

「確かに」

「では休むとしよう」

あらためてお淀に言う。

「今宵はここだな」

「はい、それでは」

こうして二人は堂の中で休んだ。せめて周りの埃や蜘蛛の巣を払ってそれでその上に寝転がって休んだ。寝苦しくはあったがそれで休むことができた。そして朝日に目覚めると。妙なことが起こっていた。

「!?!? これは」

まだ寝ているお淀の胸の上に彼が江戸で買ったあの人型の札があったのだ。見ればそれは右から左に袈裟懸けに裂かれていた。

「妙だな。わしの荷物に入れてあった筈なのに」

お淀の上にあったのだ。しかも引き裂かれていた。

「おかしなことだ。これは一体」

「！？おい大変だぞ」

「馬鹿なことをした奴がいたものじゃ」

その時だった。堂の外から声がしてきた。しかもそれは一つではない。

「何だ、一体」

「仁八様」

ここでその声によってお淀も目を醒ました。そして身体を起こして彼に声をかけてきたのだった。彼女は何があったのかわかってはいない。

第三章

「何か声が聞こえますが」

「うむ、堂の外からだ」

こう言いつつ彼は立ち上がった。そして堂の外を見る。

「誰かいるのか？」

「おい、生きておるぞ」

「運のいい男じゃ」

堂の外にいたのは農民達だった。どうやらこの辺りの村人らしい。彼等は仁八が堂から出て来たのを見て驚きの声をあげたのである。

それを見て仁八は。まず首を傾げてそのうえで今時分がいる堂の戸口のところから彼等に対して尋ねるのだった。

「運がいい？」

「全くじゃ」

「生きておるのだからな」

「生きているとは」

その言葉を聞いてまた首を傾げる。

「何が何なのか」

「一体何なのでしょうか」

ここで戸口にお淀も出て来た。村人達は彼女の姿を見てさらに驚くのだった。

「おおっ、女も生きている」

「これはまことか」

「運がいいだのまことだの」

仁はちにとってはわからないことだった。あまりにも何が何なのか。それで堂から出て村人達に対して尋ねた。お淀も一緒だった。

「あの、何かあったのですか？」

「運がいいとは」

「この堂に入ってはならんのじゃ」

村人の一人がまず二人にこう答えた。

「入れば死ぬのじゃ」

「死ぬ!？」

「左様」

その村人は死ぬと言ってから仁八の言葉に頷くのだった。

「ここには鬼か何かがおってな」

「鬼が」

「そう。それで中に入って休んだ者を引き裂いて殺すのじゃ」

「引き裂いて」

「殺す」

それを聞いて仁八だけでなくお淀も思わず声をあげた。本当のこととは思いたくなかった。

「それはまことで」

「そんなことが」

「だからこの堂には誰も入らず」

「それで朽ちるに任せておったのじゃよ」

「そうでしたか」

仁八は今の言葉でどうしてこの堂がここまで寂れているのかわかった。鬼がいるとなれば誰も近寄らないのが当然の道理であるからだ。そういうことだった。

「しかし。どうして助かったのじゃ」

「特に娘さん、あんたじゃ」

村人達はここでお淀を指差した。

「どうしてあんたが生きておるのじゃ」

「鬼は特に女を狙うというのに」

「女ですか」

「男と女がいれば両方共引き裂くのではなく女の方を引き裂くのじゃ」

「そしてそのはらわたを喰らう」

「こつも言う。」

「鬼はな。引き裂いてそのはらわたを喰らう」

「だから怖いのだ」

「しかし。それでよく助かったものじゃ。どうしてかう」

「どうしてかという」

仁八は村人達はその言葉を聞いて考えた。そのうえであの札のことを思い出したのである。

「そうか、あれか」

「あれ!？」

「あれという」

「はい、これです」

ここでその札を村人達に対して出すのだった。見ればその札は右肩のところから左脇にかけて引き裂かれていた。見事なまでに。

「一枚ですが・・・おや」

ここで彼は気付いた。間違えて二枚重ねにしていた。しかしその二枚目も全く同じ様に奇麗に引き裂かれていたのだった。一枚目と全く同じで。

「二枚でした」

「二枚か」

「では二人分じゃな」

村人達はそれを聞いてわかった。何故二人が助かったのか。

「あんた、それ何処で貰った？」

「江戸です」

村人の一人の問いに対して答えた。

「江戸で占い師に貰ったのですか」

「そうだったのか。それではだ」

「それでは？」

「それで助かったのじゃよ、あんた達は」

こう仁八だけでなくお淀に対しても言うのだった。

「これで助かったって」

「じゃあこのお札が身代わりに」

「そういうことじゃな」

村人の中で最も年輩の一人が二人に告げた。

「それで助かったのじゃよ」

「そうだったのですか」

「お札で」

「それでじゃ」

その年輩の村人はここで仁八に対して問うてきた。

「あんた、何と言われて貰ったのじゃ？」

「はい、これを持っていれば連れの者が助かると」

江戸でその占い師に言われたことを思い出す。

「そう言われて貰ったのですが」

「貰ったか。それはまた」

「それはまた？」

「運がよかったというべきか運命だったと言うべきか」

彼は首を捻りながら言うのだった。

「どっちにしろよいことじゃ。難を避けられたのじゃからな」

「そうですね。それでは」

「助かった命じゃ。大事にするといい」

また仁八に告げた。

「折角じゃからな」

「わかりました。じゃあ」

「仁八さん」

お淀がそつと仁八に声をかけてきた。寄り添うようにして。

「じゃあこれからも」

「そうだな。折角二人して拾った命だし」

「宜しくね」

「しかし。本当によいことじゃて」

「全くじゃ」

村人達は難を逃れてそつと寄り添い合う二人を見て言い合う。
「鬼から逃れることができたのじゃからな」

「その分だけ幸せになれるわ」

二人を見て言うのだった。その二人は京に戻ると夫婦になり仲睦まじく暮らしたという。しかしそれまでにはこうした思いも寄らぬ危険がありそれを避けられた幸運もあった。世の中何がどうなるかわからない。危機もあればそれを救う神も仏もいることであろうか。

裂かれた札

完

2008・5・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9834e/>

裂かれた札

2010年10月8日15時04分発行